

## <その2>

# 観測所通い

小平 桂 一 (天文)

天文学教室の屋上の望遠鏡群は、基礎実習と開発・研究に使われているが、当教室にはそれ以外の望遠鏡を広範囲にわたって使用する一般の観測活動がある。星や太陽はどこからでも仰げるように思われがちだが、望遠鏡は何処にでもある訳ではない。

太陽面上の電波輝度分布を観測するには長野県野辺山の太陽電波干渉計を利用するし、成層圏から赤外スペクトルを観測したければ、岩手県三陸の大気球観測所から揚げる気球望遠鏡を利用する。太陽コロナの観測には乗鞍山頂へでかけ、恒星系の広視野直接写真を撮るには、埼玉県の大平山や木曾の御嶽山の麓にでかける。太陽や恒星・ギャラクシーのスペクトルを得るには岡山県の竹林寺山へ行くことになる。宇宙電波源の観測には茨城県鹿島の電波研究所のパラボラアンテナも利用する。これ等の観測所はいずれも、それぞれの目的に叶った土地に設置されていて、われわれ観測者のほうからでかけて行き、

何日にもわたって滞在しながら研究なり実習なりに励むのが普通である。

私自身を例にとると、今年度は約30日間こうした観測所廻りをする事になっているが、実験・観測系のスタッフの事情は私のと似たりよったりで、多くの学生が実習のために同行する。観測系の論文をまとめる大学院生ともなれば、一人でせつせと観測所通いをしなければならない。

いきおい旅費が教室の財政を圧迫するが、本学の付置研究所を始めとするいろいろな観測施設に無理なお願いをして便宜を計っていただき、なんとかやりくりをつけている。

“人類の目”ともいうべき第一線の天文観測機器に触れ、利用する機会を多く持つことは、スタッフにとっても学生にとっても、最も大切なことの一つだからである。